

三島由紀夫『青の時代』論

——語られない耀子が語るもの——

九 内 悠 水 子

1. はじめに

一九五〇（昭和二五）年七月～二月にかけて、雑誌『新潮』で連載された三島由紀夫の『青の時代』であるが、「独自の意味を十分に持つ文学作品^①」とする武田泰淳や、「貴重な同時代の証言であり記念碑^②」とする日野啓三、「戦後の一時期の知的青春の姿を、これほどあざやかに」描いた小説はないとする磯田光一などのごくわずかな好意的評価を除いて、基本的には、「失敗作」とみなす向きがある。幼年時代は非常によく書けているが、太陽カンパニイを始めてからの主人公は、「作者として『贗英雄』というふうにして手玉にとっているつもりなんでしょうけれども、人間の方がそう動いていない^③」、前半部分は良いが後半は「剥製みたい^④」、「同情よりもひどくひやかし半分にやつつけてしまっているという感じ^⑤」といったような、否定的な評価が大半である。

一方、三島自身は、「資料の醗酵を待たずに、集めるそばから小説に使った軽率さは、今更誰のせむにもできないが、残念なことである。文体も亦粗雑であり、時には俗悪に墮してゐる。構成は乱雑で尻すばまりである」としながらも、続けて「それにもかかはらず、この失敗作に、今なほ作者は不可思議な愛着の念を禁ずることができない^⑥」と述懐する。『鏡子の家』のように、「失敗作」の烙印を押されつつも、愛着を禁じ得ない作品が『青の時代』ということになる。

この他、本格的な論考はそれほど数がないが、プレテクストとの比較、同一素材を取り挙げた他作家作品との比較、誠の論理に関する分析、表象分析、生成に関わる分析、時代との関連性など、多岐にわたるアプローチが為されている。しかしながら、それらのほとんどが、主人公川崎誠を中心とする視点で分析されており、新たな解釈の余地はまだ十分に残した状況と言える。

そこで本稿では、作品後半部から登場し、主人公誠を翻弄する女性「野上耀子」を軸として、『青の時代』を捉え直してみることにした。モデルとなる事件や人物との差異の整理、『青の時代』に見られる「語り」の手法の分析、耀子の人物造型とそれが意味するものの考察などを通じて、三島作品における女性表象について言及していければと思う。

2. 『青の時代』の背景

本論に入る前に、『青の時代』の背景について、少し整理しておく。この小説が、東京大学在学中に闇金融「光クラブ」を創設し、事業を急拡大させるも、物価統制令違反で逮捕され、やがて資金繰りに行き詰まり、青酸カリ自殺を遂げた山崎晃嗣の、いわゆる「光クラブ事件」にかなり忠実に拠っていることは、『青の時代』における序や、佐藤秀明⁸⁾をはじめとする先行研究の中で、既に明らかにされている。また、創作ノートからも、山崎の故郷である木更津の歴史や、祖父の代までさかのぼった家系、一高での寮生活や入営後の様子、当時の歴史的・経済的な背景等々に至るまで、三島が、かなり綿密な事前調査を行ったことが窺える。

一方で、小説においては、誠の一高在学時（昭和一五年初頭）（復員（昭和二〇年九月）までの六年間と、太陽カンパニーが中野から銀座へ移り、間もなく発覚した耀子の裏切り以降（昭和二四年二

月下旬）のことが、バツサリと削られている⁹⁾。このうち、いわゆる軍隊時代の六年間の削除については、野口武彦¹⁰⁾の、「小説の破綻はおそらく第六章の中途、川崎誠の生い立ちの記述から一挙に六年間を省略したところにもっとも集中的に現れ」ており、「この箇所を境い目にして『青の時代』は前半と後半に分裂してしまい」、「その縫合はうまくいっていない」という批判に代表されるように、構成上の破綻を引き起こしている、と多くの論者によって指摘されている。

しかし、先述したように、なぜ太陽カンパニーが銀座に移ってまもなくの、昭和二四年二月半ばの時点で、物語を打ち切ってしまったのかについては、これまでほとんど着目されてこなかった。この問題には、耀子の人物造型が深くかわっていると思われるが、まずは、彼女をめぐる背景を少し紐解いておきたい。

『青の時代』において、誠が執着する野上耀子のモデルとしては、山崎晃嗣の『私は偽悪者』¹²⁾に出てくる、「第六の女」¹³⁾がまず挙げられる。山崎は、昭和二四年四月中旬に、「求む秘書、近代的教養アル女性、容姿端麗ノコト」とする新聞広告を出していたが、それに応募してきたのが、この「第六の女」であった。当時の日記には、「女秘書きまる、嬉しい、美人だ」と記載されている彼女が、山崎の会社へ秘書として入社したのは同年五月一日のこと、そしてわずかその一日後の五月一〇日に、山崎は彼女をホテルへ無理やり呼び寄

せ、半ば強引に関係を持っている。なお、この時の山崎は、彼女が処女であることを毫も疑っていなかった。彼女が頻繁に掛ける電話から、税務署とのつながりを知ったのは入社後一ヶ月余りたった頃のこと、その後、彼女はすぐに会社を辞めている。つまり、働いた期間はわずか一ヶ月ほどしかなかったのである。疑うと同時に山崎は、探偵社に「第六の女」の調査を依頼し、その報告書から、税務署勤めの恋人がいること、妊娠三ヶ月であること、恋人とは約二年ほど前からの付き合いであること、などを知った。彼女の入社目的をスパイと断定した山崎は、綿密な復讐計画を練り、これを実行している。⁽¹³⁾この「第六の女」の恋人が、光クラブのある銀座を管轄とする京橋税務署に入ったのは、昭和二年の五月五日（女が光クラブに入る約一年前）である。よって、彼女の秘書としての入社動機は、山崎の見立て通り、最初から恋人に協力するためのスパイ行為にあった、とみるのが妥当であろう。税務署員の恋人を持ち、会社に対しスパイ行為を働いたこと、秘書としては非常に有能であったこと、全く疑わぬほどに完璧な処女らしさを装っていたことなどは、そのまま作中に活かされている。一方で、「第六の女」にはない要素も、耀子にはいろいろと付与されている。

耀子と誠が出会ったのは、誠が金融業に足を踏み入れるずっと以前、復員・復学直後の昭和二〇年の九月初めということになっている。作品のラストは二四年の二月半ばであるので、二人が関わった

期間は「約一ヶ月」から「約三年半」へと、大幅に延長されたことになる。誠は、耀子と初めて会ったとき、彼女の履くスカートを「世にも優美なもの」に、またその「柔軟な指さき」に「女そのもの」を感じ、「明るい乾燥した響き」の声、軽快に動く「瞳」に心を奪われていく。その後三年ほど、じれったいやり取りを重ねる中で誠は、太陽カンパニイの設立を決断、耀子は事務所のサクラとしてはじめは参加し、その後は秘書として会社運営に携わっていった。太陽カンパニイが、中野の鍋横マーケットから銀座へと進出したのが昭和二四年の一月、様子がおかしいことを察知した誠の母たつ子が、易を伴って上京してきたのが翌二月半ば、そしてその日の夜に、やっと誠は彼女に手を付けている。誠は、このとき既に耀子に彼氏がいること、会社の内情をスパイしていること、さらには妊娠三ヶ月であることを知っていた。耀子と、「下つ端の税務署員」との関係がいつ始まったのかについては、作中で明らかにされていないが、スパイ行為を働き始めるのは、少なくとも太陽カンパニイが軌道に乗り、税務署に目を付けられるほどの派手な事業を展開してからでないと辻褄が合わない。よって、その時期は、誠が彼女をデートに誘った一二月半ばから、太陽カンパニイが銀座に進出する一月初ろまでの間であると推測できるだろう。ちなみに、先述したように、誠が耀子に手を付けた二月半ばには、すでに耀子は妊娠三ヶ月であったのだから、妊娠期間等を考えると、太陽カンパニイに入社した昭和

二三年一〇月末頃の段階では、すでに恋人がいたということになる。整理すると、耀子が太陽カンパニーに近づいた時はすでに税務署員の恋人がいたが、入社時点ではスパイを行うつもりはなかったということである。

ところで、耀子の男嫌いや拝金主義、「教授の娘」という出自、あるいは太陽カンパニー設立以前の、敗戦直後から誠と関わりがあったことなどは、山崎が書き残した「第六の女」に関する情報の中には見当たらない。このような造型はむしろ、三島がモデルとしたもう一人の女のほうに見出せる。田中美代子は、『青の時代』に三島の疑似恋愛体験が書き込まれているとして、創作ノートに出てくる「佐々」（梯子）の存在を指摘¹⁵している。しかし、「創作ノート」には、野上耀子につき、「佐々モデル」と書かれている。佐々梯子は、「会計日記」等によれば、当時しばらく交渉のあった女性のような¹⁶とするのみで、具体的にどのような三島の疑似恋愛が描き込まれているかについては言及していない。そこで、耀子と佐々梯子の間にどのような関連があるのかについて以下、見ていきたい。

三島の妹、平岡美津子と聖心女子学院専門部にて同級生であった佐々梯子は、政治学者佐々弘雄の娘であった。吉野作造や美濃部達吉の薫陶を受けた弘雄は、ヨーロッパ留学を経て、九州帝国大学法文学部教授に就任し、政治学を受け持っていたが、昭和三年の九州帝国大学法文学部内訌事件によって「赤い教授」のレッテルを貼ら

れ、大学追放となる。退官後は上京し、中野正剛や緒方竹虎らの知遇を得ながら、政治評論を執筆、また、昭和八年からは近衛文麿の私的ブレイン・トラストである昭和研究会において中心的な役割を担った。戦後は、父友房と同じく議員の道へ進み、保守系無所属議員で構成された緑風会に参画、昭和二年一〇月九日に五二歳で死去している。誠は、耀子が「九州帝大の政治学教授であった人の娘」と知ると、「正直に感激を露呈」しているが、この、教授の娘という設定は、創作ノートにあるように佐々梯子（とその父弘雄）の経歴に拠ったのだろう。作中では耀子の父について「右翼政治家」との交渉が多かったと書かれているが、実際の佐々家では、「来客は絶え間なかった。緒方、中野両氏の他、左翼も右翼も出入りした¹⁷」という。

三島と梯子の個人的付き合いは戦後の二、三年ほどであったが、梯子は三島の死後、「三島由紀夫の手紙」と題する連載を『週刊朝日』にて持つ。その中では、「恋愛ほど絶対性のないものはない」、「とにかく恋愛なんてしかなかった」、裏切りが怖く嫌なため「恋愛ができない」、というようなことを書き綴っており、また、ことあるごとに議論を三島に吹っ掛けたとも語っている。ちなみに三島は、梯子への手紙の中で、「君はやっばりどこかお嬢さん風が抜けないから、「赤と黒」のマチルドを思ひださせますね¹⁸」と書き記している。雑誌『人間』の編集長をしていた木村徳三は、光クラブを題材に「戦

後のジュリアンソレル」を書かないかと三島に勧めたが、こうしたやりとりも、耀子のモデルに梯子を当ててみるきっかけになったのではないかと思われる。^{②①}

3. 『青の時代』における語り

次に、これらの背景を踏まえ、『青の時代』における語りの様相について見ていく。先行研究には、語りの手法について指摘するものがいくつかある。例えば、語り手を絶対的な権力者として見る久保田裕子^{②②}は、語り手が「超越的な視点から作品世界を俯瞰して」いる点について、「客観的な語り口によって主人公を相対化し、敢えて自分自身と乖離させよう」とする作者の意志を読む。一方、藤田佑^{②③}は、初出と初刊の差異から、権限が限定された語りが為されていると言ひ、その背景には「物語の虚構化に語り手が加担」していることを表出する狙いがあったとみる。このほか、「誠の行為を滑稽なものとして強調していく」語りが見られるとする守谷亜紀子^{②④}の指摘や、「作品の深層的なメッセージ」（近代天皇制への批判）を隠すための語りが為されているとする王淵致^{②⑤}の指摘などもある。いずれの論者も指摘するように、『青の時代』における語りには、極めて意識的な作為が見られるのであるが、ここでは、「語らない」語りという点に着眼して、分析を行っていくことにする。

デイヴィッド・ロッジ^{②⑥}は、マルカム・ブラドベリの三人称小説『ヒ

ストリー・マン』（一九七五）における主人公ハワード・カークと、彼の同僚フローラ・ベニフォームがベッドの上で繰り広げるやり取りの一節を例に挙げ、「登場人物が内心で下す解釈や作者のコメントが加えられることもなく」、「彼（彼女）は言う（訊く）」といった単純なやり取り、すなわち「描写と対話」のみで綴られていることを指摘する。性交の描写場面では、「少なくとも一方の人物の感情なり知覚なりが内面描写を通して伝えられるのが普通だろうが、ここにはそれもない」とロッジは言うのである。わざと「事物の表層」しか語らないことによって、「注意深さ」や「不安」を読者に与え、かつ「解釈の重荷」をも委ねる意図がそこにはある。『青の時代』の第一章における、誠と耀子の会話、そしてそれに続く「閨房の描写」は、まさにロッジが挙げた『ヒストリー・マン』の一節と似通っている。全集にして約四ページ半にもわたる二人のやり取りでは、「登場人物が内心で下す解釈や作者のコメント」が加えられることはほぼなく、会話のみで進行していく。^{②⑦}なお、心情だけでなく、アパート室内の描写や互いの表情、動きなどの一切も書き込まれていない。また、その後の「閨房の描写」においても、「語り手は、自らの「描写」が閨房の「真実」に遠く及ばないと言ひ立て沈黙する」。^{②⑧}この時点で誠は、耀子が実はスパイであること、また処女ではない（のみならず既に妊娠三ヶ月である）ということを知っている。二人の内心の解釈に語り手が踏み込めば、その点に触れず

にはいられなくなるだろう。事後の誠と耀子の様子においても、二人の内心に触れぬようにとする注意深い語りが為され、第一章に至って、実は誠は全てを知っていたというネタ晴らしが行われる。すなわち、ここには、三人称の語り手による、「語らない」という作為が見られるのである。このような、「語らない」語りという手法は、ニュージールランド出身の作家キャサリン・マンスフィールの作品にもしばしば見られる。マンスフィールは、「従来の語りの手法として取り入れられてきた物語世界の外側に存在する、いわゆる全知の語り手が、作中人物の性格描写や、物語背景の説明をするというような形態を積極的に採用せず、直接話法、自由間接話法といった話法を状況に応じて選択する技巧、また、内的独白や作中人物の間で交わされる会話の採択を一念にデザインしながら採り入れ」ることにより、「読者に文学世界の創造性を委ね」た。^②

『青の時代』に戻ってみると、このような「語らない」語りは、特に耀子において顕著である。語り手は、「反省といふものに大いに人生的な価値を認めてゐる誠は、（もちろん反省以外に今のところ彼の人生はなかったのだが）何でもよい滅入った考え事に自分を縛り付けて離さないことが今宵を有益に送る道だと感じた」（誠、「世間並の可憐な父親の感情から、実現しなかつた自分の希望を息子の一人に充たしてもらひたいといふ考へを夙に持つてゐた」（毅）、「川崎夫人は（中略）炭坑労働者たちの悲惨な生活の話は、

まはりの都会のどよめきのなかできくと、まるで夫人が幼ない日にきいたおそろしい因果漸のように思はれた」（たつ子）、「易はまるで対蹠的であつた。（中略）「伯爵」といふ滑稽な称号がこの感情に火を点じて激怒へみちびき、彼をして目前に行なはれている乱暴狼藉をいつのまにか正義そのもののように思はせた」（易）、「愛宕は暮し向きのことも考へなくてはならない。さういふ彼の目に誠の一挙一動は好い気なものと見えがちであつたが、けふのような意気沮喪ぶりを正直に見せられては、少なからず心を動かされた」（愛宕）といったように、程度の差はあれ、主要登場人物の内面についての描写を行っている。しかし、耀子に関しては、それがあまり見当たらない。彼女の言動や外見的な情報は描写されるが、その内面にまでは、深く立ち入っていないのである。先に見てきたように、耀子は、モデルから大きく変更され設定された人物である。美しく有能な秘書と思われた女が、実は男に溺れ、金を貢ぎ、あまつさえスパイ行為まで働く愚かな女だったというオチを導くだけならば、山崎の「第六の女」をそのまま準えてもよかつたはずだが、作者三島はそこに、「精神」を信じない、「金」（物質）しか愛さない、という特性を付与し、誠をして「自分とそっくりな存在」であると思わせるような女に造型していった。しかも、その内面はほとんど語られることはなく、読み手に委ねられる。

テレンス・パトリック・マーフィとケリー・S・ウォルシュ^③は、

マンスフィールド作品の語りにおける「the strategic suppression」(戦略的抑圧)には、「highlight a strong sense of surprise or shock toward narrative's end」(物語の終わりに向けて強い驚きやショックの感覚を強調する)効果があると指摘するが、『青の時代』における語りは、予想を裏切られた驚きとショックを与えると同時に、耀子の人物像についての再考を促す。すなわち読者に再読を迫る仕掛けともなっているのである。

4. 野上耀子とは何者か

さて、先述したように、耀子は、語り手によってその内心を語られることがあまりない。しかしながら、彼女の言動や、外的な描写を注意深く読んでいけば、彼女の人となりは、ある程度窺うことができるのである。先行研究では、耀子の人物像について、「欲望を演じ切ることに徹した人物^⑧」といった見解や、一見愛国者として造型されているように見えるが、実は、アメリカにおもねった、「パンパンガールの象徴^⑨」といった指摘などが見られるが、稿者は、それらとはまた違う耀子の人物像を『青の時代』から読み取る。

愛宕によると、耀子は「戦争中から徴用のがれに図書館につめて」いたという。日米開戦が迫る昭和一六年、政府は、戦時生産への勤労動員体制を強化するため、女子を積極的に動員する対策に着手しはじめる。しかしその後も、労働力不足は深刻の一途をたどる。

昭和一九年には女子勤労動員促進が閣議決定され、翌年には女子挺身隊が結成、一年間の動員義務が一二歳から二五歳の無就職の未婚女子に課せられ、違反者には懲役または罰金が科せられた。東条英機は議会で、余裕のある女性の徴用逃れは許せない^⑩と語ったと言うが、耀子のように徴用を逃れるための図書館勤めはさしずめ、「非国民」ということになるだろう。また、彼女の父は、政治学の教授を務めていた人物で、退官後も「右翼政治家」と付き合いの深い人物だったわけであるから、このような徴用逃れは、父の政治信条にも背く行為である。なお、耀子自身が、父へ従属しているわけではないということとは、彼女が親によって決められた許嫁の意向に沿うことを肯ぜず、結果「仲違い」して、婚約破棄に至ったというエピソードからも見て取れるだろう。父との間に軋轢を抱え、憎悪を募らせつつも、結局はその父の欲望を模倣する方向へ進もうとする誠とは対照的である。

耀子は、誠との初めての出会いにおいては、スカートを履き、白いブラウスを着ていた。そして、その姿は、「復員早々の誠の目」には、「世にも優美なものにみえた」とある。時期的には昭和二〇年九月、戦争が終わって一ヶ月も立たない頃のことである。終戦とともに進駐してきたアメリカ軍の影響は多大であり、「アメリカ軍の女性将校や軍人の夫人たちの、いかり型のスーツやフレアスカートの装い」、「豊かなアメリカン・ライフ」は庶民の憧憬の的となっ

たが、敗戦後しばらくは、社会的な混乱により、「復員婦人の男性は軍服を着たまま、女性たちはもんぺや更生服を着るなどして、窮乏生活を余儀なくされた³³⁾」という。現に、この時耀子と一緒にいた同年輩の友達は「モンペ姿」であった。まだ周囲が敗戦の痛手を色濃く残している中で、彼女はいち早く洋装に身を包み、「豊かなアメリカン・ライフ」を体現して見せている。

これらの描写により、耀子は、社会や、特定の誰かの意志に沿うのではなく、ある種の主体性を持った女性として生きているということが分かる。誠の母たつ子は、耀子と同じく「教授の娘」でありながら、夫毅ならびに川崎家、あるいはK市の旧態依然とした価値観の中から出ることができない。「あんまり聡明ではない代りに直感には秀でた母親」と評されるたつ子に対し、耀子は「聡明な処女」と語り手によってはっきり評されており、誠の繰り広げる論理にも対等に応じている。また、「男を愛することができない」とは言うものの、初対面の誠や愛宕に対して堂々と渡り合う様子を見ても、誠のような免疫のなさに起因する「異性恐怖症」のようなものは感じられない。彼女は、その時々自分の思考や主張、欲望に忠実に生きているだけなのである。誠に突き付けた「五十万円あなたの自由になるお金ができたら結婚するわ」という台詞にしても、自分にはそれに見合うだけの価値がある、と考えるからこそ出てくる言葉ではなからうか。

しかし、このような耀子が実は、「下つ端の税務署員」に「月数千円を貰いでゐるばかりか、男の出世のために、太陽カンパニイの収入の実際高を探らうとしてゐる」女であった、という秘密探偵社の報告書内容は、一見、上記のような彼女の人物像とは矛盾するようにも思われる。しかしながらこれとても、恋（男）に溺れた女の哀れな自己犠牲と見るのではなく、自分の意志で金や情報を与え、男を上げさせてやるという一種の気概、自己決定の意志の表れと考えることもできよう。そもそも、彼女の美貌と、「教授のお嬢さん」というブランドを利用すれば、学歴・地位・財産を併せ持つ、もっと良い条件の男を見つけることもできたはずだ。たとえば、昭和二二年四月一〇日付の『東京タイムス』に掲載された織田作之助の随筆「女と夫人」では、愛人を選挙に立候補させるお金を工面するために大阪の色町へ自ら身売りに来た女と、夫を馬鹿にしつつも自らは「婦人参政権」論者である婦人の話が語られている。織田はこの二人の女を対比させ、「愛人のために自分を犠牲にする「女」の方を評価する。斎藤理生³⁴⁾によれば、織田は「余儀なく性売らされるのではなく、自分の意志でこの職業を選択し「貢ぐ」と決めた「志」を評価している」のだという。耀子にしても、「下つ端の税務署員」との関係を、それまでの言動と矛盾のないよう理解するのであれば、「下つ端」の税務署員」を選び、またその彼へお金を渡したという行為を、気概と自己決定の意志の表れとして読んでも差し支えある

まい。

ところで、このような主体性、自己決定の意志を有する耀子が、「強姦の名で呼ばれても仕方のない」行為を誠から受けるにあたって、終始「処女」らしく振舞ったことは、どう読めばいいのだろうか。書類を渡して早々に帰ることもできたはずだが、彼女は、「媚態と挑戦」に満ちた言葉で以って誠の感情をかき乱した後、彼と哲学的なやり取りを延々と交わしていく。耀子は、「当てごとのやうな批評でお互ひのあらさがしをやるのは」、「為にもなるし、面白くもある」と言っているが、そのさなか、誠は彼女に気づかれないようハシカチで隠した鍵を使って扉を閉めた。彼の目的は、「口説いて屈服させること」だったはずだが、「口説」きはあきらめ、力ずくでの「屈服」へと行為を進めていく。一方の耀子は、誠がこっそりと鍵を閉めた音を聞いたのちも、「無防禦」で、「構へ」た様子は見せない。「声を立てはすまいか」と心配する誠であるが、叫ぶようなこともせず、その後は「処女」としか思えぬ表情と動きで、拒絶の中にいたわりを見せながら、「破瓜」を「巧緻を極めた」儀式として演じ通した。耀子は、自分を「屈服」させんとする誠の思惑に気づいており、且つそれを回避するチャンスもあったはずであるが、結果的には、誠の望むものをそっくり与えたことになる。保阪正康は、誠のモデルである山崎が、「女は道具」と言いつつ、かたや異様に「処女」に「こだわりつつけた」点に着目し、「山崎は〈聖〉

なるものにあこがれ」ながらも、「俗」のなかに落ちこんで行った」と指摘するが、誠も耀子の「処女」には異様にこだわっていた。

一九五〇年代に刊行された性風俗雑誌を収集しているジャパンデジタルアーカイブスセンターの「社会文化史データベース」で、「処女」と検索してみると、一〇〇件を超える記事がヒットするが、中でも、「処女鑑定秘法」^③、「処女を診断する」^④、「処女膜の鑑別はできる」といった、「処女」か「非処女」かをめぐる記事が散見され、「処女」にこたわる男がいくに多かったかが分かる。稀覯文献研究会などを組織し、江戸艶本の復刊や、戦前に醗酵された艶本の書誌的研究雑誌『稀書』の発行に関わった森山太郎は、「処女は誰がためにある―その民俗学的研究」^⑤と題する論考の中で、「処女を純潔と云い、無疵と稱し、未通女（キムスメ）と呼ぶ、その根底には果たして何がかくされているか。そして、「汚された」「疵物になった」「割られた」「冒された」「踏みにじられた」等々の言葉は何を意味しているのか。女性の商品として、処女がその価値を高めるものとして、少くとも人間的な対等な立場からは、決して口にするものの出来ない、軽蔑と侮辱に満ちたこれらの言葉は、必ずしも、無意識や偶然から生じたものではないはずである。男性の側の身に立脚して組合わされた都合主義的な倫理観からは処女の真価はとうてい論じられまい」とした上で、「処女は一体誰のものか。曰く、それらは彼女等自身のものである」しかし、「現在の女性たちの処女感はい

何かに捉われており、真に彼女等自身のものでないことに気づいているだろうか」と苦言を呈している。

「輕蔑する権利を得るための戦ひが、征服です。ある価値を征服したいと思ふ僕の目的は、ただただその価値を輕蔑したいためにすぎません」と言い放った誠は、その後、力づくで耀子をものにしようとする。これに対して耀子は、「処女」の演技で応えた。誠が耀子に見出した価値は、「身持の潔らか」な、教授の「お嬢さん」であった。そして、このこだわりを耀子自身も十二分に理解していたからこそ、望み通りの「処女」を演じてやったのである。耀子は出会いにおいても、また太陽カンパニイの社員になつてからも、誠へおもねった発言をするようなことはなく、時に高飛車な物言いさえしてきた。すなわち、支配される「女」になることを拒む意思を随所に垣間見せていたわけだが、そんな耀子が、「処女」の演技をしたところこそ、何よりの「拒絶」に他ならないだろう。手に入れたつもりかもしれないが、それは実は「贋物」に過ぎないという強烈な皮肉である。

5. おわりにく語られない耀子が語るもの

三島が反省する如く、この作品は、「構成は乱雑で尻すばまり」な面は否め⁽¹⁰⁾ない。ラストシーンでは、金融業の行き詰まりを窺わせる描写があるが、起業からわずか五ヶ月余りでの行き詰まりは、

山崎の会社経営状況⁽¹¹⁾をみて、それまでの物語展開をみて、いささか不自然である。耀子にしても、裏切りの後日談⁽¹²⁾のあたりまで書き込めば、誠が食らった強烈な「しっぺ返し」が、すなわち耀子の「男の側の身に立脚して組み合わされた」都合主義的な倫理観」に対する反発が、より明確になつたのではないかと推察する。

しかし、耀子に見られる、語らない「語り」は、ある種の三島の戦略だったとも言えるかもしれない。武内佳代は、三島が一九五〇年代に女性誌に連載した『純白の夜』、『恋の都』、『女神』、『長すぎた春』といった作品に、「戦後女性に喧伝され内面化されていたであろう性・愛・結婚の三位一体としてのロマンティック・ラブ・イデオロギーとそれを支えた純潔や貞操といった性規範」に対する「批判的姿勢」を読み、『新潮』をはじめとする男性読者向けの作品との「隔たり」を指摘する。確かに、『青の時代』や『沈める滝』などでは、男性主人公と仕事と戦後社会との絡み合いがメインとなっている。しかしながら、それらの作品に出てくる女性登場人物たちが、実は、男性主人公よりもはるかに柔軟に、既存の社会秩序をかわし、自分の在り様を主体的に模索していることは、作品を注意深く読めば見えてくる。彼女たちは決して正面だって社会秩序に対峙したり、反発したりすることはないが、従順に屈することもない。そしてそれはまた逆に、不器用に、真正面から対峙しようとして、結局は挫折していく男性主人公たちの悲劇をより劇的に演出す

る役目をも担っていることにもなる。語られない耀子が物語るの
これらのことである。

三島は、女性読者向けの雑誌に連載された作品、主として男性読者向けの雑誌に連載された作品のどちらにおいても、「既存の社会秩序」に絡めとられない「女性」を描いている。しかしその描写方法においては、巧みな書き換えがなされているようである。その詳細な様相と、年代的な変化においては、また、別稿を以って明らかにしていきたい。

注

- (1) 武田泰淳「三島由紀夫『青の時代』」(『人間』一九五・一)
- (2) 日野啓三「解説」(『新選現代日本文学全集31 三島由紀夫集』(筑摩書房 一九六〇・二))
- (3) 磯田光一「殉教の美学」(『文学界』一九六四・二)四。但し引用は、磯田光一『殉教の美学 第二増補版』(冬樹社 一九七二・二)に拠る。
- (4) 河盛好藏・瀧井孝作・武田泰淳「創作合評」(『群像』一九五一・二)。発言は河盛のもの。
- (5) 中村光夫・白井吉見「三島由紀夫」(『文学界』一九五二・二)。発言は中村のもの。
- (6) 注5に同じ。発言は白井のもの。
- (7) 三島由紀夫「あとがき」(『三島由紀夫作品集2』(新潮社 一九五三・二))。
- (8) 佐藤秀明「二つの青春―『青の時代』と『光クラブ』」(『立教大学日本文学』一九八二・七)、保阪正康『真説光クラブ事件―東大生はなぜ闇金融屋に

なったのか』(角川書店 二〇〇四・二) ほか。

- (9) 後述するが、山崎の「光クラブ」が、税務署員を恋人に持つ秘書によって内偵され、結果、逮捕されるに至る時期は、昭和二十四年五月〜七月にかけてのことであり、實在時間の改変が作中では行われている。

- (10) 野口武彦「三島由紀夫の世界」(『講談社 一九六八・二)。野口は、「贋物の英雄譚」を書くためには必ずしも少年時代を描いた前半は必要ないだろうし、この前半から持ち込まれる奇妙に抒情的な要素が、後半、金融業を初めてからの主人公を弱々しくしている」とみる。一方で、前半の生い立ち部分は良いが、後半になると「剥製みたい」(注5参照)と前半部分を評価する中村光夫のような見解もある。また、西尾幹二(『解説』『青の時代』新潮文庫 一九七一・七)は、「前半のあり方にこの作品のモチーフがあるなら、後半では個人の人間性のタイプの追究は前半にみられるほどの鮮明度を欠いていることが残念であるし、また戦後という時代への関わり方が作全体の中心テーマだとすれば、主人公の純粹に個人的な悲劇性を前半でなぜあれほど明晰に設定しているのかわからなくなる」と指摘している。

- (11) 『青の時代』のラストシーンは昭和二十四年二月下旬頃であるが、この時期の光クラブは銀座に本拠地を移し、かつ中野にもそのまま事務所を残して営業を行っていた。保阪正康(注8)によれば、新聞広告の掲載量は二十四年の一月〜六月にかけて、三行だったものが一〇行、二〇行と量を増し、またその回数も格段に増えていったという。事業はまだ拡大の一途を見せていたはずであり、少なくとも二十四年二月時点の山崎に手詰まり感の予兆はまだなかったはずである。

- (12) 山崎晃嗣『私は偽悪者』(青年書房 一九五〇・二)。但し引用は、二〇〇六・四、牧野出版のものを使用。

- (13) 注12に同じ。「第六の女」については、前掲した山崎の著書のほか、昭

和二年一月二七日の『読売新聞(夕刊)』の記事「四年の女色遍歴 学生社長 秘書には失恋」においても顔写真入りですば抜かれ、その存在が明らかにされている。また、死の数日前に行われた丹羽文雄、産婦人科医で作家の小谷剛との対談(光クラブ学生社長 アブレゲール作家 恋愛と人生と死を語る)『婦人公論』一九五〇・一』においても、山崎自らが言及している。

(14) 注12に同じ。

(15) 田中美代子『三島由紀夫神の影法師』(新潮社 二〇〇六・一〇)。16「英雄のモザイク」に引用のような指摘が見られる。

(16) 弘雄の父、友房は第一回衆議院議員総選挙(明治三十三年 より連続九期当選を続けた。弘雄は、第一回参議院議員通常選挙に立候補し当選)、議員となっている。

(17) 紀平悌子『三島由紀夫の手紙(連載第2回)』、『週刊朝日』一九七四・一一・二〇

(18) 紀平悌子『三島由紀夫の手紙(連載第1回)』、『週刊朝日』一九七四・一一・二一

(19) 木村徳三『文芸編集者その足音』(TBSブリタニカ 一九八二・六)

(20) ただし、「第六の女」にない「拜金主義」という側面については、今のところ悌子と結びつくような情報は見当たらない。

(21) 久保田裕子「氾濫する贋物、堆積する言葉——三島由紀夫『青の時代』の周辺」、『淵叢』一九九二・三

(22) 藤田祐「三島由紀夫『青の時代』論」、『国語と国文学』94(二〇一七・八)

(23) 守谷亜紀子「三島由紀夫『青の時代』におけるアイロニーの世界」、『東京女子大学紀要論集』57(二〇〇七・三)

(24) 王淵致「三島由紀夫『青の時代』論——戦後日本における天皇親政のパロディー」、『国文』133(二〇一〇・九)

(25) デイヴィッド・ロッジ(柴田元幸・斎藤兆史訳)『小説の技巧』(白水社 一九九七・六)。25「表層にとどまる Staying on the Surface」において引用のような言及が見られる。

(26) 第17章における誠と愛宕の会話も同様に、「登場人物が内心で下す解釈や作者のコメント」が加えられることはばなく、会話のみで進行していく。

(27) 注23に同じ。

(28) 久木元信一郎「キャサリン・マンスフィールド文学における「語り」と「受容」」、『東洋大学大学院紀要』59(二〇一三・三)

(29) Terence Patrick Murphy & Kelly S. Walsh Unreliable 「Third Person Narration? The Case of Katherine Mansfield」(『Journal of Literary Semantics』46(2017)。二人は本論考の中で「マンスフィールドの作品における「unreliable third-person narrator 信頼できない三人称の語り手」が与える効果について論じている。なお、『青の時代』では、「表層の語り」が採用されている一方で、メタファーとミスリードの境界線を行くような「語り」＝「騙り」も見られる。例えば、耀子が「処女」ではないという事実を誠が知って以降の描写においても、「処女」「無垢」といった言葉で彼女が語られている点などがそうである。このような「語り」＝「騙り」も、「表層の語り」における「戦略的抑圧」同様、物語の終わりに向けて強い驚きやショックの感覚を強調する効果を持ち、読者に再読を迫る仕掛けとなっていると論者は考える。

(30) 井手慎太郎「三島由紀夫『青の時代』論」、『福岡大学日本語日本文学』14(二〇〇四・一一)

(31) 注24に同じ。

(32) 高崎宗司「半島女子勤労挺身隊」について(女性のためのアジア平和国民基金「慰安婦」関係資料委員会編「慰安婦」問題調査報告書

1999』一九九九)

- (33) 渡辺明日香「日本のファッションにみるアメリカの影響―洋装化、ジャパン・ファッションの影響、ストリートファッションの現在―」(『共立女子短期大学生活科学科紀要57』二〇一四・二)
- (34) 斎藤理生「『資料紹介』織田作之助全集未収録作品紹介(四) 随筆「女と婦人」と談話」(『阪大近代文学研究18』二〇一〇・三)
- (35) 注8に同じ。
- (36) 名川寛斎「処女鑑定の秘法」(『怪奇雑誌4』(6)一九五一・六)
- (37) 「処女を診断する」(『りべらる6』(9)一九五一・九)
- (38) 平山清嘉「処女膜の鑑別はできる」(『風俗科学2』(1)一九五四・一)
- (39) 森山太郎「処女は誰がためにある―その民俗学的考察―」(『風俗科学2』(1)一九五四・一)
- (40) 注7に同じ。
- (41) 注11を参照のこと。
- (42) 山崎が美松ホールにて行った「第六の女」とその恋人への復讐、あるいは「第六の女」と恋人の結婚(昭和二十四年八月)など。
- (43) 武内佳代「性規範からの逸脱としての『純白の夜』『恋の都』『女神』『永すぎた春』―1950年代の女性誌を飾った三島由紀夫の長編小説―」(『ジェンダー研究14』二〇一・一二)
- (44) 拙稿「三島由紀夫『沈める滝』論―占領終了後の日本と、アメリカ―」(『近代文学試論60』二〇〇二・一二)
- (45) 「第六の女」と山崎とはわずか一ヶ月あまりの関係に過ぎなかったが、作中では誠と野上耀子の関係が約三年半に渡るものとして描かれている。この改変によって、拝金主義、微用回避、婚約破棄といったエピソードが新たに盛り込まれ、親や許嫁あるいは社会に流されず主体性を持つ女性としての耀子像が成立した。一方でこのことは、様々な柵、呪縛から

解き放たれたいと願うも、結局は父、女、社会等々の制約から逃れられぬ誠の悲劇を対照的に浮かび上がらせる役割を果たしていると言える。闇金融に手を染めるきっかけにしても、山崎の場合、自分の能力の限界を客観的に示してみたいという動機であったが、誠は、「金」しか愛さなという耀子に、「五十万円あなたの自由になるお金が出来たら結婚する」と言われ株に手を出し詐欺にあったことが太陽カンパニー設立の発端となっていた。誠が耀子を欲する理由において、彼女が東京の「教授のお嬢さん」という意味合いは大きかったが、このことも結局は父の野望をなぞるに過ぎない、父の呪縛から逃れえない彼の悲劇性を物語っている。

―くなく・ゆみこ、比治山大学・准教授―